
霧の摩周湖

赤影

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の摩周湖

【Nコード】

N8993C

【作者名】

赤影

【あらすじ】

僕は「霧の摩周湖」を絶叫して歌っている。会社の近くの小さなスナックだ。「亜紀ちゃんも歌ってよ!」「何がいいかなー」「なんでもいいから歌って」亜紀が選曲した曲が流れた。ショートカットに憂いのある瞳だった。歌は悲しく聞こえた。「ママこの店気に入ったから又きますね!亜紀ちゃんさようなら!」「これが亜紀との出会いだった。

北海道へ

僕は「霧の摩周湖」を絶叫して歌っている。
会社の近くの小さなスナックだ。

「亜紀ちゃんも歌ってよ！」

「何がいいかなー」

「なんでもいいから歌って」

亜紀が選曲した曲が流れた。

ショートカットに憂いのある瞳だった。

歌は悲しく聞こえた。

「ママこの店気に入ったから又きますね！亜紀ちゃんさようなら！」
これが亜紀との出会いだった。

この店に通いだしてから、1年ほどたった。

明日からはゴールデンウィークと言う日。

「亜紀！一人！」

「うん！ママすこし遅れるらしいの！」

「明日から連休だね！どっか行くの！」

「どこも行くところないもん！」

「新ちゃんは！」

「いい人でもいれば連れてどこかへ行ってもいいけど、一人ではね
！」

「あたし連れて行つて！」

「いいよ！・・・心にも無いこと言わないで！」

「本当よ！新ちゃんならいいよ！」

「それって！御泊りもいってこと！」

「新ちゃん！いやらしいこと考えている！」

「えーばれたか！」

二人だけの店で、ヘネシーの水割りで乾杯した。

「実はね！」

「えー何々！」

「私には腹違いの弟がいるの！」

「へー！」

「小さい頃、私の父はトラックの長距離の運転手で、私の母と離婚した後に来た奥さんに男が生まれたの！」

「そうなんだ！」

「でも、その女の人も家を出て行ったの！その男を残して！」

「じゃ二人になったの！でも亜紀も小さかったんでしょ。」

「あたしは小学校5年生かな！」

「どうしたの！」

「3歳だった弟、あたしが育てたの！」

「へー小学校5年生で！」

「そう！お父さんがお金入れてくれなくて、電気が止まってるうそで夜を過ごしたこともあったわ」

「亜紀苦労したんだね、水割りもう一杯作って！」

「はい！」

「それでどうしたの！」

「中1の時、弟が5歳どうしても育てられなくなって」

「どうしたの！」

「母親が北海道の留萌に住んでいて、父親とトラックで・・・」

亜紀はもう涙が止まらなくなっていた。

「苦しかったら、言わなくていいよ！」

「いいの！新ちゃんに聞いてほしいの！」

「誰もお客さん来ないし、ぼちぼちでいいよ！」

「留萌まで弟を、母親に渡しに行ったの！」

「そう！離れたくなかったでしょう」

「もちろんよ！」

又亜紀の瞳から涙が溢れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめんね！新ちゃんお客さんなのに。」

「お客さんなんて思っていないよ！亜紀もそうだったら話す気にならないでしょう！」

「うん！」

「そうして、どうしたの」

「留萌の駅で弟を母親に手渡したけど、・・・・弟はあたしの名前をずーと呼んでいたわ！」

「2年も一緒に生活したが、彼には亜紀が母親だよな！」

「その弟が今年の4月に高校を卒業したらしいの！そして札幌に就職したらしいの！」

「そうなんだ！」

「風の噂だけど！」

すこし沈黙の時間が流れた！

「亜紀！北海道行こう！行こうよ！」

「どうやって、もうチケット取れないでしょう」

「車で行こう！交代で運転して、青森からならフェリーに乗れると思う。」

「会えるか解らないけど！とにかく北海道に行ってみよう！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「行こう！店は1時で終わりだね！それから走ろう！」

「本当に！」

「本当だよ！休みは1週間あるし、店はその間2日休めばいい！」

「行こうか！」

「行こう！今9時だから僕これから帰って少し休むから、亜紀のところは2時でいいかな！亜紀目が腫れているよ、ママ来たら驚くから気をつけて！じゃ！」

僕は亜紀のアパートの住所を聞き、すごい浮き浮きして店を後にした。

愛車のキャデラックSTSを満タンにしてオイルを交換し、足回りを点検し亜紀のアパートへ行った。

亜紀はバック一つ持ち、アパートの前で待っていた。

「新ちゃん！」

亜紀の顔は店での泣き顔から、晴れ晴れした顔に変わっていた。

「さ！出発！亜紀は疲れているでしょう、眠っていいからね、シートはそのレバーだから」

「解った！」

金沢西インターを登ったのは3時少し手前だった。

「新ちゃん安全運転でね！」

「大事な人乗せているのに、勿論です。」

「眠くなったら、言ってね」

「解ったよ！」

僕は自然と亜紀の手を握った。亜紀は微笑み返して直ぐに眠ってしまった。

CDからは、ビリバンバンの焼酎のCMに変わった、音を少し落としルームミラーを亜紀の寝顔に合わせ、140kくらいでオートドライブに設定して走り続けた。

亜紀が弟と会った顔を想像して、自然と顔をほころんだ。

新潟中条で高速を下りて、国道7号戦を北上した。

村上市に入り、喉が渴いたのでコンビニに入り棚を見てみると、

「新ちゃん！」

「おきたのか！何か飲む！」

「これ買って！」

「びっくりしたな！もう！」

「びつくりさせようと思ったんだもん！」

とケラケラ亜紀は笑った。それがとても可愛く見えた。

亜紀に運転を代わって時間を見ると7時、青森は遠いと感じる。

亜紀に外車は日本車と方向指示器のレバー反対だからねと言ったのに、直ぐにコンビ二から国道に出る時に間違えていきなり笑いこけた。

サザンをボリウム最大にして、二人で歌いながら走った。

周りは完全に明るくなった。

僕は弟に会うために、整理をしようと考え、亜紀に現在分かっていることを質問した。

1、 留萌に母親がいた。

2、 弟は今年高校を卒業した。

3、 母親の名前

4、 弟の名前

5、 留萌に祖母がいた。

6、 弟は現在札幌にいる。

7、 母親の年齢

解ったことはこれだけ、これで探しだせるだろうか！と不安になる。

「亜紀！これだけ解れば充分だよ」と心にも無いことを言った。

「目的は留萌だ！GO！」

亜紀は明るく言った。

青森に着いたのは14時、フェリーの順番を待つ車の多いこと！

チケットは確保したが、係りの人には夕方になると言われた。

僕達は車の中で爆睡した。

係りの人にボルネットを叩かれ、やっとのことで起きてフェリーに車に乗せた。

津軽半島の点々とした、淡い光を甲板から眺めながら、

「新ちゃんごめんね!」

「何故!」

「こんなことにつき合わせて、連休台無しだね!」

「何言ってるの、僕は楽しんでるよ!弟と会ったら摩周湖に行こう!富良野も行きたいし!」

「うん!」

「だから、そんなこと言わないで、僕も楽しんでいるのだから、家にいても寝てるだけだったんだから」

「解った!ありがとう!」

亜紀は弟のことを思っているのだろう、不安そうだった。

札幌

函館に着いたのは21時だった。

ドキドキしながら、

「どこか泊まる！」

「いいよ！」

しかしモーターは何処も満員だった。

明日の札幌のホテルに予約して、僕達は札幌へ向かって走った。

疲れきっていた僕らは、1時間交代で運転したが、時々眠くて車を路肩に止めながら札幌に着いたのは11時だった。

チックインには早かったが、ホテルに頼み込みシャワーをして、爆睡！

目が覚めると、もう外は暗くなっていた。

亜紀はまだ眠っている！

時計を見ると19時、お腹が空いたと思ってネオンのビル街を呆然と眺めていた。

「起きているの！」

「目が覚めた！」

「うん！」

その時ドキとした。亜紀は素肌で寝ていたのだ！

ツインベットで分からなかった。

平常心を装って、

「亜紀！お腹空かない！」

「空いた！」

「何か食べに行こうか！」

「こっち！見ないで！」

「うん！」と言いながら、机の上の鏡に映る亜紀の思ったより肉好

きのいい腰のあたりを見ていた。

白の下着を着ける亜紀を見て、着痩せするのだと思った。

ホテルの外に出ると、自然と亜紀は手を組んできた。

「この街に亜紀の弟がいるんだね！」

「逢いたいな！」

「きつと逢えるさ！とにかく腹が減っては戦はできぬだ！何食べる！」

「なんでもいいよ！」

「魚かなーやつぱり！」

「そうね！」

「あの地下に行こうか！何軒食べ物やありそうや！」

「ここへ入ろう！」

その店はカウンターだけの10名位座れる小さな店だった。

北海道らしい「北の海」と言う名の店のカウンターの中には、夫婦と思われる二人が入っていた。

「いらっしやい！」奥さんと思われる女性の人は明るく行っただが、男の人は何も言わず、チラツとこちらを一度見ただけで、客もいないのに魚を捌いていた。

「亜紀！生でいい！」

「うん！」

「中二つください！」

「はい！」女性は明るく返事をした。

メニューを手に取り、

「刺身何か！美味しいのありますか！」と男の人に尋ねると、女性の人が

「大間のマグロと同じところに取れた、マグロありますが！」

「それください！それとホッケ焼いてください！後はおまかせで！」

「札幌の人でないでしょう！どこから来たの！」

「金沢です。」

その時、主人の顔が少し変わった。

「そうですか！私達も実は金沢ですよ！」

初めて主人が声を出した。

「何でも喋るな！お客さんに失礼だ。」

「何が失礼よ！いいじゃない！ね！」

僕達は思わずうなずいた。

「それで、加賀のお酒置いてあるのですね！菊姫、加賀鳶など！」

「そうです！」主人は初めて僕に対して話してくれた。

「お酒は飲めますか！」

「僕は大好きです。」

「じゃーおごりです。」

「ありがとうございます！」

亜紀に向かって、主人は

「お嬢さんも飲みますか！」

「はい！」

「これは菊姫大吟醸です。」

「えーこの酒高くなかった。」と亜紀は言った。

「そうだね、1万くらいじゃない！」

「一緒に飲みましょうよ！」

「私はもう飲んでます。」

女の人は明るく答え、そして色々なことを聞いてくる。

歳は！夫婦か！旅行！質問攻めにあう。

「お前喋りすぎだぞ！」

関係を聞かれた時に亜紀は「恋人ですと答えた。」僕は何故か嬉しかった。

僕達は素直に色々な話をした。

生き別れの弟の事を亜紀が話すと、女の方は涙を流して聞いてくれた。

「会えるといいね！」

それからお客が何人か入ってきたので、僕達は店を出た。

さー明日は留萌だ！

留萌

古びた留萌の駅は、高倉健が出てくる映画の世界だった。舗装もしていない駅の駐車場に車を止めた。

「此処で弟をお母さんに渡したの！」

「どっちの方向に見送ったの！」

亜紀が指を指した。

「一軒ずつ聞こう！」

「すみません！美奈子さんのお宅ではありませんか！金沢にお嫁に行っていた方ですが！」

20軒ほど回った時、「その人なら、吉田さんのとこでないかなー、此処から5件目の家を右にまわって3件目ですよ！」

「ありがとうございます。」

「すみません！すみません！ごめんください！」

家の奥から老婆が出てきた。

「美奈子さんのお宅です！」

「美奈子は嫁に行ったが・・・」

「美奈子さんは、石川の金沢にお嫁に行ったことありますか！」

「ああー」

「男の子が一人いますか！」

「ああー」

「その男子の住んでいるところ知りませんか！」

「私は年寄りで解らないが、札幌でないか！」

「では美奈子さんは何処にお嫁にいったのですか！」

「豊富というところだ！」

「名前は！」

「吉田だ。」

「ありがとうございます。」

僕達は豊富に向かった。

豊富は留萌から稚内に向かって150K、サロベツ原野の中にある小さな温泉町だ。

「色んな事がわかったからもうダイジョブ亜紀！」

「そうね！」

「弟は札幌にいるんだよ！母親に住所を聞けば完璧だ！」

僕は少し興奮して言った。

亜紀も嬉しそうにうなずいた。

日本海に沿って真っ直ぐな道が走っている。

何も遮るものが無く、右は原野、左は日本海だ。

暫らく走ると利尻富士が、海に浮いて見えてきた。

「亜紀！綺麗だね！」

「うん！」

言葉も失ってその景色を堪能しながら走った。

豊富温泉に着いたのは夕方だった。

「亜紀！今日はここに泊まり明日探そう！」

「解った！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8993c/>

霧の摩周湖

2010年10月11日11時47分発行